

201201020A

厚生労働科学研究費補助金

政策科学総合研究事業

社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ  
—被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究—

平成24年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 開原 久代  
平成25(2013)年3月25日

研究課題名（課題番号）： 社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ  
—被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究—（H23-政策-一般-007）

平成24年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 開原 久代

平成25（2013）年3月25日

~~~~~ 目次 ~~~~~

I. 総括研究報告

被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究 .....1  
研究代表者 開原 久代

II. 分担研究報告

海外調査研究

1. 外国人研究者招聘による .....4

～日本の施設、里親家庭の治療的支援の研究～

研究分担者（代表） 開原 久代

研究協力者 春日 明子 森 和子 平田 修三

資料

1. 情緒障害児短期治療施設 那須子どもの家講演会質疑記録 .....9  
2. 早稲田大学講演会記録 .....11  
3. 津崎哲雄先生・Tomlinson 氏 対談 .....41  
4. 桐野由美子先生・Tomlinson 氏対談 .....50  
5. 児童養護施設 調布学園講演会記録 .....65  
6. 二葉乳児院里親支援機関事業 里親委託等推進員との座談会（図表あり） .....77  
7. 二葉乳児院講演会記録 .....90  
8. 講演会の感想・里親アンケート .....100  
9. Tomlinson 氏原本スライド日本語訳（1 治療的ケア 2.LSW） .....102  
10. Tomlinson 氏報告書 .....125

|                                                              |     |
|--------------------------------------------------------------|-----|
| 2. 米国の Evidence based Treatment Foster Care プログラムの実態調査 …………… | 131 |
| ～いかに地域資源の協働を基盤に実施されているか、14 機関訪問記～                            |     |
| 研究分担者 桐野 由美子                                                 |     |

|                                            |     |
|--------------------------------------------|-----|
| 3. パリ県を中心とした里親委託の現状と課題 ……………               | 140 |
| ～ 関係機関のインタビュー調査を通して ～                      |     |
| 研究分担者 林 浩康                      研究協力者 菊池 緑 |     |

#### 国内調査研究

|                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| 4. 平成24年度全国養育家庭のアンケート調査と里親面接調査 …………… | 206 |
| ～里親による里子「療育」の日々、そして里子（被虐待児）の心的世界～    |     |
| 研究分担者 深谷 昌志    研究協力者 深谷 和子    青葉 絃宇  |     |

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 1. 里親全国アンケート調査（2236人アンケート調査） ……………  | 207 |
| 2. 札幌・岩見沢・川崎・明石・姫路 19名の里親面接調査 …………… | 252 |
| 3. リコメンデーション ……………                  | 299 |

#### 資料

|                                            |     |
|--------------------------------------------|-----|
| 1. 里親問題・里親制度に関する意見、希望、感想等（アンケート調査の自由記述より）… | 307 |
| 2. 養育家庭アンケート調査票 ……………                      | 318 |
| 3. 集計表 ……………                               | 331 |
| 4. 事前アンケート用紙 ……………                         | 338 |
| 5. 事例原稿の収録諾否用紙 ……………                       | 344 |

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 5. 日本の里親支援機関の実態調査研究 …………… | 345 |
| 研究分担者 平田 美智子              |     |

研究協力者 三輪 清子    山口 敬子    小松 満貴子

#### 資料

|                                        |     |
|----------------------------------------|-----|
| 1. 里親支援機関事業 委託機関（施設等）訪問調査項目と回答 ……………   | 351 |
| 2. 里親支援機関事業の民間委託に関する自治体訪問調査項目と回答 …………… | 365 |
| 3. 里親支援機関訪問結果 ……………                    | 374 |
| 4. 里親支援機関事業の民間委託に関する自治体訪問調査結果一覧表 …………… | 376 |

# 平成24年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

## 総括研究報告書

### 社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ —被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究—

研究代表者 開原 久代 東京成徳大学子ども学部 教授

研究要旨 第二年度は、重いトラウマを背負った社会的養護児を養育する里親家庭と施設への治療支援の研究のエビデンスをつかむために、全国66カ所の里親会の2236人の里親のアンケート調査を行い、1209人（回収率54.1%）から回答を得、一部の個別面接を加えて里親の心情とニーズを明らかにした。また、代表的な日本の里親支援機関10カ所とその事業を委託している8自治体の訪問調査を行い、その実態を明らかにし、必要な支援体制を検討した。さらに、すでに先駆的な支援機関の実績のある海外の事情を調査するため、米国のEBP(Evidence Based Practice)をめざす治療的里親支援機関14カ所の訪問聞き取り調査と、治療的支援の歴史のある仏国パリ県の8カ所の機関の訪問調査を行った。同時に、海外の専門家招聘により、日本の現状を把握した上で、海外の先駆的業績と日本の実態と文化に根ざした日本の治療的支援機関の具体案を作成するために、昨年訪問調査した英国のSACCS治療センターの元施設長を招聘し、日本の施設訪問、講演と座談会などを通して関係者との交流と討議を重ねて、治療支援機関の構想を固めた。

#### 研究参加者氏名・所属・職名

##### 研究分担者

|        |              |      |
|--------|--------------|------|
| 開原 久代  | 東京成徳大学       | 教授   |
| 深谷 昌志  | 東京成徳大学       | 特任教授 |
| 桐野 由美子 | 京都ノートルダム女子大学 | 教授   |
| 平田 美智子 | 和泉短期大学       | 准教授  |
| 林 浩康   | 日本女子大学       | 教授   |
| 横堀 昌子  | 青山学院女子短期大学   | 准教授  |

##### 研究協力者

|        |             |      |
|--------|-------------|------|
| 湯沢 雍彦  | お茶の水女子大学    | 名誉教授 |
| 深谷 和子  | 東京学芸大学      | 名誉教授 |
| 菊池 緑   | 養子と里親を考える会  | 理事   |
| 青葉 紘宇  | 東京養育家庭の会    | 理事長  |
| 春日 明子  | 第二調布学園      | 園長   |
| 小松 満貴子 | ジェンダーと制度研究会 | 主宰   |
| 森 和子   | 文京学院大学      | 准教授  |
| 兼井 京子  | NPO法人カモス    | 理事   |
| 松平 千佳  | 静岡県立大学短期大学部 | 准教授  |
| 山口 敬子  | 立教大学        | 助教   |
| 三輪 清子  | 首都大学東京大学院   | 博士後期 |
| 平田 修三  | 早稲田大学大学院    | 博士後期 |

#### A. 研究目的

本年度は、被虐待児の養育で苦慮している里親家庭と施設職員を支援する治療的支援機関のあり方をさらに具体化するために、海外、国内の調査活動を行った。

海外調査では、昨年の英国SACC治療センター訪問時に協力を得た元施設長のPatrick Tomlinson氏を招聘し日本の実態を視察の上、日本で求められている支援のあり方を討議することをめざした。また、米国、仏国の治療的支援機関の訪問、聞き取り調査では、海外の先駆的活動の実態を明らかにすることをめざした。

国内調査では、昨年につき、治療支援に対する里親のニーズと心情を把握するために里親の全国的アンケート調査と一部の面接調査を行なった。また、2008年に発足した里親支援機関事業の実施状況を本年度は代表的な機関を訪問調査することによって日本の里親支援の実情を把握することをめざした。

これらの内外の実態のエビデンスにふまえて、治療支援のあり方をさらに明確にすることを今年度の目的としている。



## B. 研究方法

くわしい研究方法については各々の分担報告書を参照してほしいが、研究班ごとの概略を以下にのべる。

海外調査として、開原班は外国の専門家を招いて日本の実態を視察した上での交流研究を企画した。招聘者 Patrick Tomlinson 氏 (T氏) には日本の児童福祉施設 5 か所の視察、4 回の講演会と専門家との対談、座談会などで関係者との交流討議を深め、日本で求められている治療支援機関のモデル像を検討した。講演、対談、座談会の記録は、招聘者の報告書とともに凡てテープ起こし、翻訳を行って資料として添付している。

桐野班は、米国シアトル、ピッツバーグ、ボルチモアの Treatment Foster Care Program がいかに地域資源の協働を基盤に実施されているかを調査するために 14 か所の民間、公立の支援機関を訪問してインタビューを行っている。

林班は研究協力者菊池と、仏国パリ県の被虐待児を養育する民間の里親委託機関 8 か所を訪問し、16 人の所長や関係者のインタビュー調査をおこなっている。

国内調査では、深谷班が 66 か所の里親会に 2236 部の調査票を依頼し、回収数 1209 部 (回収率 54.1%というアンケート調査を行い、自由記述も凡て記載し、虐待のトラウマを背負う里子の養育の苦慮を明らかにしている。さらに昨年に続いて地域別の里親面接調査も行い、今年度は札幌、岩見沢、川崎、明石・姫路在住の 19 人の里親面接を行っている。

平田班は、23 年度のアンケート調査に回答した里親支援機関の中から選出した 10 か所の支援機関の訪問と、この支援機関事業を委託した都道府県の担当課を訪問して事前に知らせてある質問項目にそってインタビューをおこなっている。回答の内容については、機関名が特定されないように配慮して資料 1～4 にまとめている。

以上、24 年度は 5 人の研究分担者による研究がおこなわれたが、研究内容については、本研究班のプロジェクトメンバーのメーリングリスト上で、研究の進行状況を報告し意見交換をお

こなっている。

## C. 研究結果

T 氏の招聘活動については、困難事例の治療的施設ケアの自らの体験に根ざした 4 回の講演は、施設職員だけでなく、24 時間の養育で苦勞する里親の共感も得て、これまで経験したことのない有益な研修と評価された。T 氏の日本の施設視察では、家庭とはほどおい公共建造物のような施設があるという印象を与え、家庭的なグループホームの設置が強調された。そうしたグループホームと里親ケアをリンクさせた治療支援センターが必要で、治療的ケアを行う施設の必要性も強調された。

米国調査では、良質な民間の里親家庭治療支援機関が財政的な効率の悪さから廃止されている現実が報告され、経営母体が自治体の場合もあるが、民間機関は寄付と実績で継続が保障されるという運営の厳しさが明らかにされた。

仏国の治療的支援機関の調査では、地方自治体が財政支援をしているので機関運営は安定し、多彩な専門職チームが活躍し、里子はホームレスから精神障害まで多様な事例が受け入れられていた。里親は専門家の治療チームの一員として活動し、職業化された専門職で、社会的養護児の支援者として位置づけられ、里親に国家資格制度もあることなど、親として里子と暮らすことを熱望する日本の里親とは際立った違いがみられている。

里親の全国調査では、里親の属性、里子の心身の発達、虐待の影、育児困難の現状、愛着形成、養育返上など多岐にわたるアンケート項目の統計的分析がなされ、きわめて厳しい里親の療育困難の実態が明らかにされた。特に自由記述には、里子のトラウマに根ざした多彩な問題行動と里親の苦勞が浮き彫りにされている。面接調査は昨年の 33 例につづき、今回は 19 例となり、全国地域により里親のかかえる問題が異なっていることが伺えた。

里親支援機関の調査では、経営母体として、里親会、児童家庭支援センター、施設、法人などがあるが、それぞれの特徴と担当職員の資格などを調査しているが、児童家庭支援センター

型や施設型では、本体施設の専門職チームの基盤があり治療支援が可能と思われるが、多くは事務機能も専門体制も不十分であることが明らかとなった。また、支援機関の民間委託が可能となったことで里親に身近かで親しみやすい支援機関となることが期待されている。

倫理面への配慮： 訪問調査や聞きとり調査、アンケート調査の報告に際しては、被虐待児や里親のプライバシーには十分配慮し、公表に関しては関係者の承諾をとっている。また、調査対象者や機関名が特定されないように配慮している。

#### D.考察

3年計画の研究の2年目として、虐待などのトラウマを伴う社会的養護児を養育する里親家庭と施設職員への治療的支援のあり方のエビデンスをつかむ調査研究を行うことができた。最終年度には、困難事例に対応できるような里親や施設職員のリクルートと研修プログラムについて外国からの招聘専門家によるモデル研修やワークショップを計画している。

また、海外調査では、仏国の里親の国家資格や、研修内容の調査とオーストラリアの年長の困難事例の治療的施設ケアについて Lighthouse Foundation の訪問調査を予定している。国内調査では、全国の里親の地域別の面接調査と養育返上した里親の調査により里親のかかえる療育困難の実態をさらに調査する予定である。また里親支援機関の担当者の交流をかねたシンポジウムを開催して日本の里親支援の現状を明らかにし、本研究の課題である治療的支援機関のモデル像を示し、ケアパッケージへの提言を行いたい。

#### E 結論

今年度は、18名の研究分担者と研究協力者による研究となったが、5名の研究分担者が報告しているが多くのプロジェクトのメンバーからの協力を得ていることを感謝したい。今回掲載できなかった一部の研究協力者の調査研究

は次年度の報告書に掲載する予定である。

#### F 健康被害

本研究では、健康被害の問題はない。

#### G.学会発表

今年度の学会発表および、予定されている発表については、各報告書に記載されている。

#### 謝辞

本研究遂行にあたり、煩雑な経理事務を担当した東京成徳大学十条台キャンパス総務課 元木章大氏の多大な労に感謝したい。

# 平成24年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

## 分担研究報告書

### 外国人研究者招聘による ～日本の施設、里親家庭の治療的支援の研究～

研究分担者（代表者） 開原 久代  
研究協力者 春日明子 森和子 平田 修三

近年、重いトラウマを背負い治療的支援を必要とする社会的養護児が増加しているが、日本では、児童養護施設や里親養育における治療的ケア、治療的支援についての具体的論議は極めて少ない。本研究班では、社会的養護児に先駆的な治療的支援を行っている欧米の現場を訪問調査することにより、日本で実現可能な支援方法を検討しているが、同時に、欧米の専門家に日本の社会的養護児支援の現場を視察してもらい、関係者と討議を重ねることにより、日本の文化に根ざしかつ先駆的な治療支援システムを構築することの意義を考え、今回、実務経験のある専門家を招聘し交流研究を行った。招聘者 Patrick Tomlinson 氏は、昨年調査訪問した英国 SACCS 治療センターの元施設長で、治療的ケアと施設運営の専門家、研究代表者とメールによる討議を重ねてきた。来日により施設訪問、施設・里親関係者との討議、講演を行い、困難事例の養育に苦しむ施設、里親関係者の実態を把握し、有意義な意見交換と助言を得ることができた。家庭的なグループホームを基盤とする治療支援機関の設置、良質なケア職員と里親の採用と研修、困難事例で苦しむケア担当者へのスーパーバイズシステム等を日本の従来のシステムを基盤にした治療的支援機関の設立案を提示するための準備を行うことができた。日本の里親および施設職員研修や、ケア担当者の採用のあり方をさらに検討するために25年度も Tomlinson 氏を招聘し討議を深め、具体的な治療的パッケージ作成を予定している。Tomlinson 氏の著書「治療的施設ケア」は、国際医療福祉大学の医師を中心に翻訳が完成し、本年出版予定である。

#### A. 研究目的

日本では、重いトラウマを伴う被虐待児など、児童養護施設で対応が困難な子どもは、情緒障害児短期治療施設（情短施設）や児童自立支援施設、時に精神病院入院による対応が求められるのみで、児童養護施設や里親家庭での治療的ケアが論じられることはなかった。また、2009年の国連総会決議で、施設養護は家庭的な環境で行うべきという提言があり、大規模施設のグループホーム化の動きがはじまっているが、困難事例に対しては情短施設を増やすという考えはあっても、治療的グループホームの発想はまだ根付いていないのが現状である。

本研究班は、昨年度、困難事例に対する先駆的取組をおこなっている SACCS 治療センターを調査訪問したが、さらに詳しい情報を得るために、本年度、SACCS 元施設長の Patrick Tomlinson 氏（T氏）を招聘し、日本の現場関係者との交流、討議を通して、日本で実現可能で意義のある治療的ケアの実践と里親と施設職員のための治療支援機関設置の構想を練ることをめざした。

#### B. 研究方法

T氏は2012年10月11日来日、21日帰国、というはじめての来日日程の中、下記のような過密なスケジュールで活動を行い、専門家、里

親、施設職員との交流、日本の代表的な児童福祉施設訪問、4回の講演会と座談会を行った。

#### I：講演及び懇談・座談会

(10月13日以降の講演の通訳は通訳会社吉香所属の辻直美が行った。)

1. 10月12日(金) 那須こどもの家(情短施設)講演会と質疑 参加者 施設関係者と嘱託医師 23名(スタッフによる通訳)  
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1 国際医療福祉大学大田原キャンパス内
2. 10月13日(土) 講演会と質疑 早稲田大学早稲田キャンパス 参加者 里親14名 里子2名 研究者11名 児童福祉機関職員5名 学生8名 計40名  
〒160-805 新宿区西早稲田1-6-1
3. 10月13日 夜の意見交換会(早稲田大学キャンパス内) 参加者 里親3名 里子OB1名 研究者4名 福祉機関職員2名 学生6名 計16名
4. 10月18日(木) 講演会と質疑 調布学園(児童養護施設) 参加者 施設職員45名 研究者・弁護士・ジャーナリスト等10名 里親5名 計60名
5. 10月18日(木) 午後の調布学園意見交換会 参加者15名  
〒182-8533 調布市富士見町3-1-1
6. 10月20日(土) 座談会 二葉乳児院  
参加者 乳児院院長 養育家庭の会理事長 里親支援機関事業担当者9名(東京臨床心理士会3名 キアアセット2名、二葉乳児院4名) 計11名
7. 二葉乳児院 午後の講演会と質疑 参加者 里親家庭里親10名 養子縁組里親7名 施設職員3名 里親支援機関事業担当者8名 計28名  
〒160-0012 新宿区南元町4

#### II：施設訪問

1. 10月11日~12日 那須こどもの家(情短施設) 宿泊による訪問と講演  
〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1 国際医療福祉大学大田原キャンパス内
2. 10月16日 京都市児童福祉センター青葉寮(情短施設) 訪問  
〒602-8155 京都市上京区主税町910-25
3. 10月17日 大阪市立 阿武山学園(児童自立支援施設) 訪問  
〒569-1041 大阪府高槻市奈佐原956
4. 10月18日 調布学園(児童養護施設) グループホーム2か所、中舎制施設2か所、母子生活支援施設等 園内訪問  
〒182-8533 調布市富士見町3-1-1
5. 10月20日 二葉乳児院 院内訪問見学  
〒160-0012 新宿区南元町4

#### III：専門家との対談

1. 10月15日 17:30~21:00 京都にて 京都府立大学公共政策学部教授(英国児童福祉施策専攻)津崎哲雄氏と Tomlinson 氏の対談
2. 10月16日 15:00~18:30 京都にて 京都ノートルダム女子大学人間文化研究科大学院教授(研究分担者)桐野由美子氏と Tomlinson 氏の対談

#### C. 研究結果

講演および質疑、対談、座談会、T氏の講演スライドと報告書(日本語訳)については、以下の資料に全記録を掲載した。

1. 情緒障害児短期治療施設 那須こどもの家講演会質疑記録
2. 早稲田大学講演会記録
3. 津崎哲雄先生・Tomlinson 氏 対談
4. 桐野由美子先生・Tomlinson 氏 対談
5. 児童養護施設 調布学園講演会記録
6. 二葉乳児院里親支援機関事業 里親委託等推進員との座談会(図表あり)
7. 二葉乳児院講演会記録
8. 講演会の感想・里親アンケート
9. Tomlinson 氏原本スライド日本語訳
10. Tomlinson 氏報告書(日本語訳)

#### I：講演及び懇談・座談会について

講演内容については、T氏が取り組んだ困難事例の施設ケアの体験を里親にも参考になるように話すこと、日本の施設職員と里親はライフストーリーワーク(LSW)に関心があることを事前に知らせたところ、「治療的ケアへの道のり」と「LSW」の講演スライド100枚が送られてきた。開原が日本語訳スライドを作成し、参加者のニーズに合わせて適宜抜粋して講演を行い、質疑に時間をとるように依頼したところ、参加対象者に合わせて見事な協力が得られた。(資料1、2、5、6、7)

4回の講演は、参加者にあわせて内容を変え、会場からの得た質問があると活気ある雰囲気となっていた。困難事例に取り組んだ経験のない一般参加者にとっては、期待した海外の専門情報取得の通常の講演会とは異なっていたかも知れない。早稲田大学では4時間の講演と懇親会の質疑で6時間の講演となったが、調布学



園では多数の施設職員が参加したが、1時間半の講演で会場によって差があったが、配布資料で補足してもらった。二葉乳児院の里親対象の講演会は4時間におよび、休憩時間も個別の質問を受けるなど、困難な事例の対応で苦慮する里親への具体的な対応に焦点をおいた講演となった。里親支援機関事業を行っている二葉乳児院における里親支援員（名称：里親委託等推進員）との座談会では、T氏に日本の里親、里子の統計資料の説明と里親支援の現状が説明された。また、自らが里親で東京養育家庭の会の理事長から、日本の里親の立場、心情の報告がなされた。また、里親支援員には特別な研修や資格制度はなく、公務員心理職の経験者や、心理士、社会福祉士で施設勤務の経験者が中心となっていることが報告された。こうした経歴の支援員が24時間困難な子どもと生活する里親にどのような支援が出来るかの苦慮も討議された。東京都児童相談センター治療指導課に1985年に開設された宿泊治療では、はじめて心理職がローテーションに入り夜勤務をおこなったが、当時宿泊治療の心理職を経験した支援員からはその経験が役に立っていると報告された。二葉乳児院では講演会参加者のアンケート（資料8）を行っているが、現場体験をもつ専門家の話は従来の里親研修では得られなかったものという意見もあり、これまでの研修のあり方に何らかの刺激となったことが伺われた。

## II：施設訪問について

困難な事例を受け入れている児童福祉施設の中から、設立年数の古いもの新しいものをまぜ、精神科医、小児科医、専門スタッフの協力が得られた5か所の施設に見学を依頼した。治療的施設ケアを行う日本の代表的施設として情緒障害児短期治療施設を2か所、設立間もない「那須こどもの家」と一番古い京都の「青葉寮」を訪問した。那須こどもの家に関しては、スタッフおよび協力医師団に、T氏の著書の翻訳を依頼してあったため、その打ちあわせのために来日直後の宿泊による見学となった。また児童自立支援施設は、スタッフがT氏と交流があった大阪の阿武山学園を訪問した。児童養護施設は、東京都の専門機能強化型施設の認定を受け困難事例受け入れの多い調布学園に依頼した。調布学園は、園長の一人が本研究班の研究協力者で、研究代表者の開原が嘱託医を務めているところである。乳児院については、T氏と里親との交流の機会を得るために里親支援機関事業を行っている二葉乳児院に依頼した。

施設見学のT氏の印象については資料10に示したが、英国では大規模の学校や公共建物のような構えの施設は廃止され、ふつうの家庭のような小規模の施設（日本のグループホームに相当）が主流となっているので、建物の外観から訪問施設の殆どが、「いわゆる施設、institution」であるという印象を受け、家庭的雰囲気のものに改善すべきことを強調している。

また、治療的ケアの原則として、ホームの台所で料理されたものを皆と一緒に食べることを強調しているので、子どもの居住の場の台所が機能しないで、外部から食べ物が運ばれる施設の仕組みには批判的であった。

乳児院に関しては、その存在に否定的な欧米の専門家が多いが、T氏は、見学の印象として手厚い人的配置と、愛着関係を重視する対応をみて、重いトラウマを背負った困難事例には、年齢が高くても、乳児院のような対応が、治療的ケアには必要と強調した。乳児院がアルバム作成や生い立ちの記録を大切にしていることをLSWに相当すると高く評価していた。

## III：専門家との対談について

T氏と日本の専門家との対談で、日英米の社会的養護児をめぐる諸問題と専門的支援のあり方を自在に討議してもらい、本研究班の課題をより明確にすることを期待し、適任の下記の2人の大学教授に協力を依頼した。

10月15日には、英国の児童福祉研究の第一人者で施設職員の経験もある京都府立大学公共政策学部教授（英国児童福祉施策専攻）津崎哲雄氏とT氏の対談をおこなった。津崎氏は、T氏からロンドン出身の学者と間違えられるほどの堪能な英語で、互いに共通する基盤から幅広いテーマで対談がすすめられた（資料3）。

T氏は、ソーシャルケア、治療的ケアの専門家であると同時に、政策科学や社会経営学の専門家でもあるので、話題は英米日の社会福祉事業が、政策やビジネスに翻弄される問題が論じられた。心理治療者については、米国では9.11を機に心理治療者が氾濫し、心理治療の売り込みがビジネス化し、レジリエンスを無視した治療の押しつけが批判されているという情報などは、日本の現状に繋がる興味ある話題であった。英国では、つぎつぎ新しい施策が掲げられると、それまでの事業がその有効性が論議されないまま廃止されることが話題となった。今回の一連の講演で紹介されたT氏の治療的施設ケア体験の原点となったCotswoldの治療的CommunityもCommunityという考え方が差別的であるという視点で廃止され、Every Child Mattersの論議に移行していることが話題となった。

10月16日には、本研究班の研究分担者で9月に米国の14カ所の治療的里親支援機関の訪問調査をおこなった京都ノートルダム女子大学人間文化研究科大学院教授桐野由美子氏とT氏の対談をおこなった。桐野氏はソーシャルワ

カーとして長い米国在住歴があり、英語が堪能であるため、T氏は、自分の考えをきちんと理解してもらえ相手として日本の関係者に伝えてほしい多領域の課題を長時間語るという対談となった(資料4)。桐野氏は、今回の米国調査で、意義のある治療的支援事業が経済的に効率が悪いからと廃止されてゆく現状に直面し、社会福祉事業の米英の経営環境が論議された。

英国では施設運営の資金は委託された子どもの人数で決まるため、委託児が減ると施設は経営出来なくなり閉鎖される不安があること、米国では、民間からの寄付で支えられている部分があると言われているが、今回、効率の悪さを理由に、治療的支援機関が閉鎖される実態が明らかにされ、英米の社会的養護児支援の財政基盤が論議された。桐野氏は、米国では児童養護施設をきびしく否定する傾向があることに疑問をなげかけ、T氏も、著しい困難な子どもの行き着くところが施設であるため悪評を受けやすいが、そうした困難事例のために、治療的ケアをめざした小規模施設の重要性を強調している。

T氏と津崎氏、桐野氏との対談では、講演や会場での質疑では得られない、多岐にわたる課題が引き出され有意義な企画となった。

#### D. E. 考察と結論

T氏は、2006年の子ども虐待防止学会国際会議(ISPCAN 英国Yorkで開催)での発表口演をきっかけに知り合い、メール交流を重ね、彼が開発に携わったSACCS治療センターを訪問し、彼の著書に接し、日本の社会的養護児の治療的支援に大変役に立つ専門家と考え、招聘にいたったが期待通りの成果が得られた。現在は、米国在住で、これまでの経験をもとに困難事例の治療的ケアや施設運営に関する著作活動と施設の専門的運営について国際的なコンサルタント事業を行っており、日本への支援に大変意欲的である。

T氏の日本訪問報告(資料10)には、具体的な治療的施設ケアの体制づくりとケア担当者の募集、研修が提言されているが、治療的グループホームと里親支援をリンクして運営すべきという提案は、日本で実績のあった東京都の養育家庭センター(2002年に廃止)に近い発想といえる。治療支援機関の構想については、良質な施設として評価されている児童養護施設に開発センターを設置しモデル事業を行い、全国に広めるという基本的な方法である。今年度の全体の研究活動で、国内調査で、平田班の里親支援

機関の訪問調査があるが、その中で、すでに社会福祉法人の児童福祉施設の中でまさにT氏の示した里親家庭の専門的支援が実施されているので、今回の研究により既存の活動を推薦してゆくことも次年度行いたい。また、全国里親会へのアンケート調査で、困難事例の養育に苦慮する里親の姿と、適切な支援体制の乏しさが報告されているので、支援機関のモデル事業のパッケージづくりは急務である。

資金の裏付けが課題であるが、社会的養護児支援の通常予算を取得することは行政の中で可能であるかも知れないが、良質なケア職員の確保、レベルの高い研修システムを運営するには、一般経費では困難であることが危惧される。英米にみられたように、良質な運営がされていても経済的な効率で廃止される心配がある。すでに、高く評価されていた東京都の里親家庭センターが2002年に廃止され、現在もそれを惜しみ現在の支援員はその実績をモデルに仕事をしているということであることも知らなければならぬ。これらの課題にむけて、25年度も再度T氏を招聘し、治療的ケアの具体的内容についての施設職員と里親への研修やワークショップ、日本の里親家庭の民間の治療支援機関設立にむけて関係者によるシンポジウム開催などにより、ケアパッケージの具体案を示したい。

#### G. 研究発表

24年度は2012年12月8日に、JaSPCAN日本子ども虐待防止学会第18回学術集会高知りょうま大会で、以下の表題で口演発表を行った。

「治療的グループホーム設置の提案」

——厚労省科研費研究による英国のSACCS治療センター訪問調査の報告から——

25年度は、2013年12月13~14日 JaSPCAN日本子ども虐待防止学会第19回学術集会 信州大会で報告予定

#### 参考文献

Tomlinson氏の著書

- Therapeutic Residential Care for Children and Young People: An Attachment and Trauma-informed Model for Practice, Barton, S., Gonzalez, R. and Tomlinson, P.

(2011, Book published by Jessica Kingsley, this book is being translated into Japanese for publication in 2013). これは、現在、国際医療福祉大学の小児科医、精神科医、心理士の総勢9人により翻訳中。平成25年6月福村出版社より出版予定。

- A Child's Journey to Recovery: Assessment and Planning in Work with Traumatized Children Tomlinson, P. And Philpot, T, (2007, Book published by Jessica Kingsley).
- Therapeutic Approaches in Work with Traumatized Children and Young People – Theory and Practice Tomlinson, P (2004, Book published by Jessica Kingsley).

Patrick Tomlinson 氏  
10月13日早稲田大学講演会にて



## 資料 1

### Patrick Tomlinson 氏 那須子どもの家 視察・講演後の質疑応答のまとめ

講演日時：平成 24 年 10 月 12 日（金） 10 時 20 分～12 時

会場：国際医療福祉大学 情緒障害児短期治療施設 那須子どもの家 会議室

参加者：那須こどもの家スタッフ及び嘱託医師など計 23 名

司会：下泉秀夫 国際医療福祉リハビリテーションセンター センター長

通訳：倉本亜美 国際医療福祉大学理学療法学科助教

編集記録：丹羽健太郎 那須子どもの家心理療法士

#### 1. コツワルドコミュニティーの子どもと職員の生活について

木島施設長：「コツワルドコミュニティーは、非常に自然が豊かな中で職員がコミュニティーの中に一緒に生活していることが子どもたちにもものすごくいい影響を与えていたと思う。」

パトリック氏：「麻薬とかドラッグとかを使っていた都会から来た子たちは、コツワルドへ来ると、牛や羊がいて、季節があり、その季節の中で収穫がある、それが毎年同じように繰り返される、そういう変わらないものがあることが、子どもに大きな与える影響を与えていた。」

#### 2. 週 40 時間制、5 人制の小さい単位になった影響

木島施設長：「職員が勤務時間にあまりとらわれず、またコミュニティーにはたくさん子どもたちがいた。それが週 40 時間の制度にかわり、5 人制の小さい単位になった。」

パトリック氏：「コツワルドは、10 人から 5 人にしなければいけない、40 時間しか働いちゃいけない。田舎の農場という特殊な環境は問題があり、都会のようなみんなが住んでいるところに行かせないといけないとなった。そのため、コミュニティーとして維持することができなくなり閉鎖された。」

木島施設長：「40 時間制になると、職員が交代制勤務になることは、こどもとの愛着関係の形成の成立に問題が生じるのではないか。」

パトリック氏：「誰か一人は、特別にその子を思う、自分の担当みたいな感じになることが必要で、そうしないとアタッチメントは形成されない。」

#### 3. アセスメントモデルについて

医師：「アセスメントモデルで、一番改善しやすい傾向のあるものと一番改善しにくい傾向のあるものは何か。」

パトリック氏：「アタッチメントが一番大事。信頼できる人ができるということで、学習面も

良くなるし、学習面が良くなるとコミュニケーションが良くなり、コミュニケーションが良くなるとまた学習面が良くなるなど全部つながっているのので、1つが良くなると、他のものも徐々に良くなっていくことが多い。頻回にホームが変わった子は、アイデンティティの形成だけが突出して低く、なかなか確立されない。」

#### 4. 日本の情緒障害児施設の建物、施設運営について

心理士：「那須こどもの家の施設の中を見学された感想はどうですか。

（講演の前に那須こどもの家を見学された。その際、2、3階の居住スペースは見学できておらず、1階の心理療法室、遊戯室しか見学できていなかった。）」

パトリック氏：「おもちゃがいっぱいある部屋（箱庭療法室）にいったので、専門家の先生たちが、子どもたちをおもちゃを通して、治療を通して、子どものことを知ろうとしているのがわかった。こういうのはイギリスには無く、イギリスでは施設は家みたいな感じ。ここは建物自体が学校みたいな感じで建てられている。

施設長を含めて、みんなスタッフと話すことがすごく大切で、自分が幸せな気持ちで働いているかどうか、満足していなければ、何について満足していないか、それをどう改善していけばいいかを話し合うことが大切。変化を起こすことは時間がかかるが、小さな変化は時間がかからないので、小さな変化からやっていくことが大切。

子どもをケアする気持ち、どういう風にケアしていきたいのかが一番大切。インドの同じような施設に行った時に、建物はひどく、物は何にもなかったが、子どもたちがどんなに大事にされているか、どんなに良いケアが与えられてるかをしっかり感じる事ができた。物ではなくて、ひとりひとりの気持ちが一番大切。」





\*\*\*\*\*

資料2 《招聘講演会》

早稲田大学にて 2012年10月13日

## 治療的ケアへの道のり

パトリック・トムリンソン

元 SACCS 経営戦略部長

コンサルタント協会事務局長

通訳：吉香通訳株式会社 辻 直美

スライド資料邦訳：開原 久代

講演録編集：菊池 緑

\*\*\*\*\*

司会（平田修三）： それでは始めさせていただきます。本講演会は、厚生労働省科学研究費補助金事業、「虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究」の一環として米国より招聘されたパトリック・トムリンソン氏による講演「治療的ケアへの道のり」をお聴きいただきます。私は本日、司会を務める平田と申します。早稲田大学里親研究会の代表を務めています。また今回のプロジェクトチームの一員です。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、プロジェクト代表、東京成徳大学子ども学部の開原久代教授よりごあいさついただきます。

開原： 今日は、お忙しい中、お集まりくださいましてありがとうございます。この講演会は、今、お話がありましたように厚生科学研究の助成によるものです。また、「早稲田大学里親研究会」と「養子と里親を考える会」の共催で行われております。

それでは、講師パトリック・トムリンソンさんをご紹介します。6年前にイギリスのヨークで「国際子ども虐待防止学会」がありまして、彼が講演されたのを私はうかがいました。日本でいうとグループホームのようなと

ころで、重いトラウマを背負う子どもの治療的支援をしておられるお話をうかがいました。私は精神科医ですが、日本では、大体、そういう難しい子どもは精神科医に任せるとか、心理の人に任せるとか、場合によっては、情緒障害児短期治療施設や児童自立支援施設に入れることで、処理されているのですが、トムリンソンさんたちが普通の施設ケアで取り組んでおられる姿を見て、大変感銘を覚えました。そのことをもっと知りたいと彼に相談し、昨年度の科研費活動で、彼が仕事しておられた英国の SACCS という子どもの治療施設を見学することが出来ました。今年度は彼を招聘させていただいて、日本の実情を見たうえでいろいろとお考えを伺うという企画をいたしました。トムリンソンさんは、ずっとイギリスで仕事しておられましたが、現在はアメリカに移られて、いわゆる施設ケアのコンサルタントをオーストラリア、イギリスを相手にしておられます。

今日はトムリンソンさんのご経験にもとづいたスライドを見ながらお話をお聴きします。吉香通訳会社の辻さんという優秀な方が通訳して下さいますので、ぜひ皆さんからもどんどん質問していただきたいと思います。トムリンソンさんも初めての来日で、日本の実情はあまりご存じないとは思いますが、皆さんの質問を通していろいろ考えてくださると思うので、質問に時間を取りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

トムリンソン： 開原先生、ご紹介をありがとうございました。今回はお招きいただきまして大変光栄です。

まず、今日、参加して下さっている方々が、どんな方なのかを知りたいと思います。まず、里親さんに挙手をお願いしてよろしいでしょうか？ ありがとうございます。大学

関係の方はどのくらいいらっしゃいますか？ リサーチプロジェクトの関係者は？  
2つ以上に該当する方は？

かなり長い時間を頂いておりますので、できる限り、皆さまのご質問にお答えできるようにしたいと思います。

## 1. はじめに

それでは、私自身のプロフィールということで、どのような仕事をしてきたのかということをお話して、治療的なケアの必要な子どもたちとどのように関わってきたのかお話しします。あとの半分はライフストーリーについてお話ししたいと思います。

日本語のスライドを見ながら、通訳を聴いていただくこととなりますけれど、ご理解いただけますようにお願いします。

1984年に遡りましてこのような仕事をしてきましたが、30年も経ったことに驚きを覚えます。当時、私は22か23歳ぐらいでしたが、1984年にイスラエルのキブツで、6ヶ月のボランティア活動を済ませて英国に戻ってきました。英国では、どんな仕事をするのかと、当時よく質問されましたが、漠然としか考えておりませんでした。何をすべきかわからない状態でした。ただ、若い頃、ボランティアで、子どもと関わる仕事をしたことがあったので、やはりそのような仕事をしたいと漠然と考えてすでに社会事業経営学の資格をもっておりました。

## 2. コツワルド・コミュニティ (The Cotswold Community)

当時はインターネット等が普及する前でしたので、情報収集も非常に難しく、新聞広

告を見て仕事を探したとき、コツワルド・コミュニティの募集を見ました。それで十分な情報がないままに面接を受けに行きました。当時、そこは認可学校と呼ばれていましたが、実は、少年刑務所のような所でした。67年当時、政府のシステムがうまくいっていなかったため、実際にそこを出た子どもたちの85%から90%が大人になってから刑務所入りしていたという状況でした。ですから、政府は違ったアプローチをしたいということで、そのコミュニティを通して新しい施策を実行しようとしていました。



これは、コツワルド・コミュニティの写真です。農村地帯で羊や牛や農作物のある土地にあります。スタッフも子どもたちも、そのスタッフの家族も、ここに一緒に住んでいました。受入れた子どもは40名ぐらいで、我々は子どもたちの治療を学べるというコミュニティでした。そのため、罰を与えるのではなく、まず、子どもたちを理解し、子どもたちと一緒に暮らしながら治療を進めようとして、1969年にスタートしました。私が着任したときは、設立後、すでに17年経っていました。すでに著しい問題をもつ少年達の治療施設として内外に知られていましたので、欧米諸国、ロシア等から沢山の訪問者やボランティアが訪れました。特に、日本からも政府関係の方々、20名以上の大

きなグループで見学に来たことを覚えています。確か80年代だったと思います。

私の話はそのほとんどがこの施設における体験ですが、里親、フォスターケアの面からも関連がありまして、コツワルド・コミュニティは世界的にも有名になりました。

### 3. リーダーと顧問の先生たち

まずは治療的ケアで成功するには、3つの重要な要素があります。

まず、非常に難しい状況にある子どもたちに対して、組織として非常に強いリーダーシップを発揮することが必要です。

2点目は、明快なアプローチをもって、子どもたちを支援し、理解しようとする姿勢が必要です。どうすれば、最も効果的にアプローチできるのか、子どもたちの助けになるのかということを明確にするということです。

3点目に、組織全体のサポート、どういった支援をどう提供していくのか、例えば、指導としての訓練、トレーニングにしてもどういった形での支援形態を含んでいるのかというところをしっかりと組み立てることが重要なポイントです。

コツワルド・コミュニティの理論的な背景、ベースになっているのが、小児科医 Donald Winnicott の理論です。

お聞きになられたことのある方、挙手をお願いします。日本でも多くの方がご存じということで、大変驚きます。

こちらの写真は、バーバラ先生です。この方は子どもたちに対応する我々にアドバイスをして下さる臨床面の顧問で、子どもの精神分析医として活躍された先生です。そのお仕事自体が Donald Winnicott 先生の理論にもとづいて行なわれ、Tavistock 研究所の人

間関係論を取り入れて施設全体の相談にのってくださいました。非常に見識のある、ほんとに親切な方ですが、時に非常に強い面もある先生でした。

5. Barbara Dockar-Drysdale  
バーバラ先生



コンサルタントとしていろいろな相談で苦悩しておられた時期もありまして、コミュニティ内で私もバーバラ先生にちょっと異論を唱えたときもありましたが、2、3分後には、「あなたは、まだそんなに経験を積んでいないから、私の言うことがわからないのよ」と叱られました。「もう2、3年経ってもっと経験を積めば、私が正しいということがわかるでしょう」と言われました。

### 4. 採用時のインタビュー

まず面接のとき、私は自分の子ども時代のこと、このコミュニティにおける仕事との関連について手紙を書くことを要求されました。このことは、里親としてのケアと施設におけるケアの両方でとても重要なことだと思います。やはり子どもたちとかかわる際に、自分の子ども時代の経験が、突然、湧き上がってくるとか、自分でも忘れていたことが、子どもを通して表面化してくることがあるからです。

面接後、ボランティアとして3日間体験訪問に招かれました。これは、面接だけではな

くて、実体験としてそこがどういう環境なのかを肌で感じるということです。採用する側も応募者側も、決断する前に仕事の内容を体験し考える機会を得るということで、とてもいいやり方だと感じました。

## 5. ホームの子どもとスタッフの人数

80年代には、1カ所の施設に大体10人の子どもたちが過ごしていましたが、コツワルド・コミュニティは、近くの街から5マイル（8キロ）ほど郊外ありまして、子どもたちは、4カ所の家に10名ずつ住んでいました。スタッフとその家族は、コミュニティの中の自分の家に住んでいます。

そして、10人の子どもを5人のチームの職員が担当し、普段は3人の職員が常に一緒に過ごしました。我々は、週に70～80時間ぐらい朝7時半から夜11時までの5日勤務でした。施設でのケアといっても、ほとんど里親に近い形で、ほとんどの時間を子どもたちと過ごし、週に2、3日ぐらい同じ場所に寝泊まりをしていました。スタッフをあまりコロコロ変えずに、一貫性のある形で同じスタッフが子どもたちと関わることが、子どもたちにいい影響を与えるからです。この体制で、例えば、日曜日から水曜日の勤務が決められました。

問題が起こると、夜中まで、時には明け方まで働き、仲間の誰かが病気になると、職員は休暇を返上して働きました。それは賃金を得るための仕事という、天職であり、人生となっていました。

## 6. 受入れた子どもたちとその生活

### ◇ 海岸での休暇

これは、子どもたちを休暇に、海岸に1時間くらい連れて行ったときの写真です。私がどこにいるかわかりますか。



### ◇ 学校教育

この子どもたちは、コミュニティの中の小さな学校で教育を受けていました。学校は施設と隣接した徒歩2、3分のところにあります。教師たちも、夕方や週末を少年たちの家で率先して過ごしていました。教師たちと職員との密着した仕事が小さいけれどもしっかりと結びついたチームを築くことができました。これは、子どもたちにとってよい方法でしたが、時に、教育とケアの境界が不鮮明になり、まずいこともありました。年月を経て、治療的ケアと教育の課題がだんだんはっきりしてきました。

### ◇ 自然環境と子どものケア

このコミュニティは、農村地帯にありまして、かなり広い土地で生活をしています。きのうは那須こどもの家でプレゼンテーションをさせていただきましたが、そこで受けた質問の一つに、やはりこういった農村のような自然環境で過ごすことが子どもたちにとっていい影響を与えるかどうかという質問を受けました。もちろんそれは良い環境だと思います。大都市のロンドンやマンチェスターのような所と比べても、やはり自然に恵

まれた環境のほうがよいと思います。恐らく、東京のような大都市の方は、こんな農村地帯、田舎に住むことがよいのかと思われるかもしれません。東京という大都市に、私は本当に驚いています。子どもたちは、家族の非常に混沌とした状態のなかである時期を過ごして、非常に難しい体験をした子どもたちですが、田舎には、四季が感じられる環境があります。作物を植えて、それを収穫するという一定の自然の秩序のなかで暮らすことで、難しい体験をしてきた子どもたちも、そういった秩序のもとでなんらかの力による影響を受けます。そういう体験ができる機会をもてることが第一に必要なではないかと思いません。

#### ◇著しい行動

皆さまの中には、非常に難しい子どもたちと接している方もおられると思いますが、この子どもたちは、著しいトラウマ体験をもち、回復して成長するには、特別な治療的ケアが必要ということが、私にも、まもなくわかってきました。

当時、23歳だった私は、子どもたちがどういう問題を引き起こすのかということがわかっておりませんでした。初めて、その光景を目にしたとき、大変ショックを受けました。たとえば、10～14歳の年長の少年たちが制止できないパニック状態になり、2人の大人から身体的拘束を受ける中で、悲鳴を上げ、叫び、つばを吐き、蹴ったり、殴ったりの行動を見た時でした。

私は、このような子どもがいることを知りませんでした。

少年たちは、なかなか面白い子たちで、評価できる面をもっていました。突然、静からカオスの状態に変貌したのです。

私のような新参者には、何が彼らを豹変させるのか、その特別な理由をみつけることが出来なかったのです。

子どもによっては、静かで幸せそうに見えて、落ち着いてるなあという子どもでも、2、3年後には、突然暴れだしたり、叫びだす行動に出ます。どうしてそこまで突然変わるのかを、私は、当時、理解できなかったですね。たまたま複数の子もたちが座って夕食のテーブルについているとき、突然、走り始めて、何か物を投げたり豹変することもあるのです。

以上を最初の区切りとして皆さまから、何かご質問があればお受けします。

#### 【質疑応答1】

司会： 質問される方は名前と所属をお願いします。

質問者1： 里親のフクイといいます。コミュニティには、何歳から何歳ぐらいの子どもたちがいるのですか？

トムリンソン： 一番若い年齢層で大体、8歳ぐらいから14歳ぐらいまででしたが、14歳ぐらいになって非常にいい成長をしていけば、14歳から18歳ぐらいまでの少年たちに対しては、もう少し独自に、自分たちで自分の面倒を見られる独立性を促していく形の別の施設がありますので、そこでケアをすることもありました。

ほかにご質問ある方がいらっしゃいますか。よろしいでしょうか。

#### 7. なぜこんな困難な仕事をするのか？

考えてみますと、このような難しい仕事に長時間取り組むことにどうして興味をもったのか不思議に思うことがあります。いくつ



か思い当たることがあります。私は、

コミュニティにいる少年たちの生い立ちを知りました。ほとんどは、生後まもなくから、時に、自分の親たちからひどい虐待とネグレクトを受けてきたのです。

私は、やはり子ども時代から、周りにそういう難しい環境に置かれている子どもたちに対して、例えば、ご両親のどちらかを亡くしたような子どもに対して何か助けてあげたいという気持ちを抱いていたことを思い起こします。

精神分析とかサイコセラピーがどれだけ効き目があるのかわかりませんが、そういう専門家の意見を聞きますと、こういった難しい仕事に取り組む人は、なんらかの無意識のレベルで何か理由があって、そういう選択をしているんだと言われています。なんらかの強い動機がなければ、ここまでの難しい子どもたちと向き合うことは、続けられるものではないということです。施設ケアであれ、里親養育であれ、やはり非常に強い動機を持って、これをやり遂げるのだという意識づけが必要になります。

そのほか、感情的に心理的に強く打たれたことがあるとか、強い動機を持っていなければ、どうしても負けてしまいます。何人もの私の同僚もなんとかケアをしようとしたけれども、精神的な強さがなかったために、途中であきらめてしまったということがあります。

#### ◇ 無意識の中での償い

他の理由としては、私は大家族の中で育ち、常に感謝し、恵まれない人々のことを気遣うよう教えられてきたからかも知れません。

他人に尽くす仕事を選ぶ人々は、自分の中に何かを充たし、また、自分が両親に与えた迷惑への無意識の償いをしているのかも知

れません。

ある意味で、どのような動機でこうした仕事にかりたてられたかは、関係のないことかも知れません。

#### ◇ 個人的な動機

しかし、仕事への姿勢として、深い個人的モチベーションを持つことは、大きな違いをもたらすのです。ある人たちは何かよいことをしたい、可哀そうな子どもに愛を与えたいという感傷的な気持で仕事をしています。そのことは悪くはないのですが、深い動機がなければ長続きしません。

あなたを無視し、憎み、傷つけようとし、あなたのやることは凡て拒否し、しかも来る日も来る日も同じことを繰り返す子どもを愛することは至難の業です。自分のモチベーションのレベルについて、どのくらいの覚悟があるのか考えてみて下さい。

私は、どのような困難があっても辞めないぞという大きな決意を感じていました。

私は、時にくたくたになり、絶望的になった時も、この決意が最初の数年のわたしを支え、またしがみついていた。

#### ◇ 精神的回復力 レジリエンス

決意を持つと同時にレジリエンスが必要です。ある人たちは、精神的なレジリエンスが乏しくてこうした仕事にむきません。自分にレジリエンスがあるかは、これまでの人生を考え、困難な状況にどう適応してきたかを考える必要があります。

怒り、悩み、悲しみなどの強い感情を持つことは健全といえますが、もし、こうした感情に打ち負かされるようでは、難しい子どもたちにかかわる仕事は無理かも知れません。

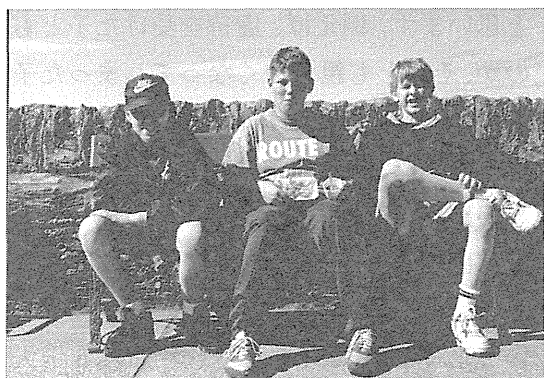
◇子どもたちの成長と発達を見ることももちろん、これだけ困難な仕事ではあっても、一方で、非常に満足感を得る、楽しむことができるという側面もあります。そのコミュニティのなかでも、非常に難しい子どもでも、幸せそうに楽しそうに遊んでいるときもあります。また、注目をされたいという子どもたちの願望もありますので、そういう意味では、難しい一方で、楽しめる側面もあるというのが、この子どもたちとの生活でした。

私はテスト訪問の際、子どもとのかかわりのひとときを楽しみました。一つのホームに10人の子どもがいるのですが、皆、発達のレベルが異なり、ある子どもとはうまくやれましたが、難しい子どももいました。子どもたちは、ちゃんと発達してゆくということを見るのは楽しいことでした。

ある子どもは、訪問者の関心を引き寄せようとするので、少なくともゲームをしたがる一人の子どもの相手をするのは簡単でした。それで、子どもたちの大半と一緒に過ごすことは、興味もあり、面白く、愉快なことだと感じました。

#### ◇ 海岸でのフィッシュ&チップス

これは、休暇中にフィッシュ&チップスという食事をしているところです。



この写真を撮ったあとに、座っている周りにカモメがたくさん飛んでいたんですね。そこ

には、《餌を与えないでください》という掲示がありましたが、子どもたちの一人が、非常に機嫌が悪くて、何かムシャクシャしていたんでしょうか、その禁止にも拘わらず、知らないふりをして、鳥に餌を与えてしまった。持っていたポテトチップスを投げたんですね。鳥が飛んでくると、その子は、魚のチップのほうをサッと取り下げたので、鳥は、また飛び去って行きました。その結果、その子はさらに機嫌が悪くなりました。ほかの男の子たちは、その子をあざ笑いました。笑われた子は、持っていたソーダを激しく振って、笑った子たちにそれをかけましたが、激しく振ったので、自分にも、そのソーダがかかってしまい、さらに、怒り心頭になってしまいました。

#### ◇ 職員の個人的成長

私が最初に訪問した時、多くのスタッフは、「この仕事はあなたを変えるよ」と言ってくれました。彼らによると、仕事は自分の子ども時代と自分の性格に踏み込んでくるので、つらいけれど、人間としての成長に繋がるといいます。

私はこの考えに興味を覚えました。

コミュニティは、自分が成長し変わることが出来る場所であり、職場だと感じました。それで長時間労働や、ふつうの社交的な生活を諦めることも、その仕事の濃密さが子どもたちだけでなく、自分にもためになると感じたのです。

その時は、自分はこの仕事を2～3年ならやれると思いました。

こういう仕事をするとき、こういう子どもたちと関わることで、自分自身を成長させる、自分を変えることができるという話を私は